東北大医保健学科紀要　21(1)：41～49，2012

原　著

保健師が参画する実践コミュニティの意義に関する一考察

伊藤加奈子[1]，末永カツ子[2]

[1]仙台市健康福祉局障害者支援課
[2]東北大学大学院医学系研究科　保健学専攻

A Study of Communities of Practice Superintended by Public Health Nurses

Kanako ITO[1] and Katsuko SUENAGA[2]

[1]*Disabled People Support Section, Public Health and Welfare Bureau, City of Sendai*
[2]*Department of Health Sciences, Tohoku University Graduate School of Medicine*

Key words：Public Health Nurse, Communities of Practice, Explicit Knowledge, Tacit Knowledge

In this study, we interviewed public health nurses who organize and head informal learning societies about both the background and the significance of their communities of practice, and collected their reports. We examined key phrases from the interview and their reports.

As a result, we learned that behind the communities of practice, there lie "questions and insecurities about work," and a "lack of places for exchange." Public health nurses who superintended such learning societies referred to them as "places of empowerment," "places to share and confirm ideals, posture, and attitudes," "places to have relationship and hand down activities," "places to review and revise activities," and "places to acquire explicit knowledge."

Furthermore, it was suggested that the categories as "places of empowerment" and "places to share and confirm ideals, posture, and attitudes" have possibilities to be significant as places to reaffirm the origins of public health nursing. And it was suggested that the categories as "places to have relationship and hand down activities", "places to review and revise activities," and "places to acquire explicit knowledge" have possibilities to be significant as places to explore creative activities together.

はじめに

近年，急激な少子高齢化の進展により，地方自治体の保健師が取り組むべき健康課題が多様化，複雑化し，より専門性の高い創造的な地域保健活動を展開していくことが求められている。しかし，行財政改革，地方分権の推進，成果主義の導入等が行われる中で，保健師の活動形態の変化や業務量の増大等により，保健師の実践活動を支える現任教育の推進や自主的な学習会等の実践コミュニティの形成が行われにくくなっている現状がある。

実践コミュニティ（Communities of Practice）[1]は，経営学や地域開発の分野等で注目されているナレッジ・マネジメントの重要なコンセプトである。実践コミュニティとは，「あるテーマに関する関心や問題，熱意などを共有し，その分野の知識や技能を，持続的な相互交流を通じて深めていく人々の集団のこと」[1]である。誰もが職場や学校，家庭や趣味等を通じていくつかの実践コミュ

ニティに属している。

従来から，このような保健師の実践コミュニティである自主的な学習会での交流や情報交換等についての重要性については　参画している保健師たちによって体験的に語られてきている[24]。しかし，保健師の実践コミュニティの意義等について記述した研究報告は見られない。

そこで，本研究では，自主的な学習会を参画している保健師へのインタビュー及び学習会がまとめた報告書から，保健師活動における実践コミュニティの背景と意義を検討した。

方　　法

1. 研究対象

研究対象は，A県で実践されている自主的な学習会に参画している保健師8人へのインタビュー内容と，この学習会がまとめた報告書の記述内容である。

2. 研究方法

自主的な学習会に参加する保健師8名を対象にフォーカスグループインタビューを実施した。インタビューでは，インタビューガイドを作成し，自主的な学習会に参加することの意義や思いを自由に語ってもらった。インタビュー内容は対象者の了解を得た上で録音した。本研究では質的記述的研究方法を用い，録音した内容から逐語録を作成し，意味を失わない程度の分節で区切り，意味内容の同質性，異質性に従い，サブカテゴリーとカテゴリーを形成した。これらの質的分析・解釈にあたっては，一定の段階で対象者にフィードバックし確認作業を行った。また，質的研究及びその指導経験のある者よりスーパーバイズを受けた。

3. 倫理的配慮

本研究のインタビュー対象者には，研究の趣旨，研究協力中断の保証，匿名性の確保，データの管理方法等を文書と口頭にて説明を行い，署名にて承諾を得た。データは匿名化を行い，保管についてはセキュリティ対策を行った。本研究は東北大学大学院医学系研究科倫理審査委員会の承認を得て行った。

結　　果

1. インタビュー結果

1）インタビュー対象者の概要

インタビュー対象者は，A県の保健所及び市町村で勤務し，地域保健活動の関わる自主的な学習会に参画しているベテラン保健師8名である。平均年齢は53.9歳，保健師経験年数は平均31.8年であった。

2）分析結果

インタビューデータを分析した結果，自主的な学習会の背景としては，2つのカテゴリーが，自主的な学習会の意義については，5つのカテゴリーと13のサブカテゴリーが抽出され，これらをそれぞれ表1，表2にまとめた。

以下では，インタビューデータの内容を〈　〉，サブカテゴリーを〔　〕，カテゴリーを【　】で示す。

1）自主的な学習会の背景（表1）

自主的な学習会が必要とされた背景として抽出された2つのカテゴリーは，【仕事の中での疑問・不安】【交流の場の不足】であった。

【仕事の中での疑問・不安】には，〈これでいいのか，大切なことは何なのか，疑問，矛盾を感じる〉，〈押しつぶされそうになったり，不安になったりして，前向きになれない〉こと等が含まれていた。

表1. 自主的な学習会の背景

カテゴリー	インタビューデータ
仕事の中での疑問・不安	これでいいのか，大切なことは何なのか，疑問，矛盾を感じる
	押しつぶされそうになったり，不安になったりして，前向きになれない
	悩みを職場で分かってもらえないと，不安になる
	分散配置のためひとり職場なので，自分が向いている方に迷う
交流の場の不足	自分の考えや意見が聞いてもらえない
	一緒に語る場，理解しあう場がない

【交流の場の不足】には，〈自分の考えや意見が聞いてもらえない〉，〈一緒に語る場，理解しあう場がない〉が含まれていた。

2）自主的な学習会の意義（表2）

自主的な学習会の意義として抽出された5つのカテゴリーは，【エンパワーする場】，【理念・姿勢・態度を確認し共有する場】，【相互につながり活動を伝承する場】，【活動を見直し修正する場】，【形式知化する場】であった。

【エンパワーする場】には，〔ほっとでき充電できる場〕，〔自分の思いを表現できる場〕，〔互いに認めあい励ましあう場〕という3つのサブカテゴリーが含まれていた。〔ほっとでき充電できる場〕は，学習会の場が〈羽を休める巣〉となっており，〈他の人の話を聞いて心がホッとする〉場や，〈自信を持っていいんだと充電できる〉場となっている。〔自分の思いを表現できる場〕は，〈安心して自分の思いを言える貴重な場〉や〈自由に自分の考えていることを言い話し合える場〉等になっている。〔互いに認めあい励ましあう場〕は，〈それでいいよって励ましてくれる〉場や，〈いいじゃないって言われてまた頑張ろうなってなる〉，そして，〈ちょっと肩を押してもらえる〉場となっていることが語られていた。

【理念・姿勢・態度を確認し共有する場】には，〔自分の立ち位置を確認し共有する場〕，〔保健師活動のマインドに触れる場〕の2つのカテゴリーが含まれていた。〔自分の立ち位置を確認し共有する場〕は，〈自分の立ち位置が分かる見える〉場，そして，〈自分のあり方を確認し共有できる場〉になっている。〔保健師活動のマインドに触れる場〕は，〈一貫して住民を大切にするという姿勢に共感する〉，〈住民中心の考え方を聞くと自信が持てる〉ことなどが語られ，一貫して住民中心に活動を進めて行こうする保健師活動で大切にされている姿勢・態度に触れることができる場となっていることが語られていた。

【相互につながり活動を伝承する場】には，〔活動のエッセンスやエキスを共有する場〕，〔互いに学び合う場〕，〔先輩からの学びを伝える場〕，〔活動のおもしろさを伝える場〕の4つのサブカテゴリーが含まれていた。〔活動のエッセンスやエキスを共有する場〕は，〈貴重なエッセンスを聞かせてもらえる〉，〈すごい活動を展開した時の思いを聞くとそのエキスがでてくる〉場となっている。〔互いに学び合う場〕では，〈誰が来てもいいし何を言ってもいいし気軽に学び合える場がほしい〉から参加していることや〈互いに勉強してみようしてみたいっていう気持ちがあるので参加している〉こと等が語られ，気軽に参加でき互いに学び合う場となっていることが語られた。〔先輩からの学びを伝える場〕では，〈先輩に教えてもらったことを伝えたい〉，〈保健師の魅力を引き継ぎたい〉等が語られ，教えてもらったことや育てられてきたことを学び伝える場となっていることが理解できる。〔活動のおもしろさを伝える場〕では，〈ダイナミックな活動の手ごたえやおもしろさを感じてもらいたい〉，〈保健師の活動のすごさを味わってほしい〉等が語られており，保健師活動のおもしろさを伝える場となっていることが語られた。

【活動を見直し修正する場】には，〔自分の活動を振り返る場〕，〔新たな活動への気づきを得る場〕の2つのサブカテゴリーが含まれていた。〔自分の活動を振り返る場〕では，〈自分はどうだったか振り返る〉，〈間違っていたり行き過ぎていたりする部分を修正できる〉等が語られ，参加者自身の活動を振り返り修正していく場になっていることが理解できる。〔新たな活動への気づきを得る場〕では，〈みんなすごい仕事をしているなと刺激を受ける〉，〈自分とは異なる考え方や活動を提案してくれる〉等と語り，次への活動への新たな刺激や気づきを得る場となっていることが理解できる。

【形式知化の場】には〔活動記録様式の形式化〕と〔学習会報告書の作成〕の2つのサブカテゴリーが含まれていた。〔活動記録様式の形式化〕では，〈学習会をして地域保健活動の展開過程と成果を記録する様式を作った〉と語られ，〔学習会報告書の作成〕では，〈学習会で学んだことを報告書としてまとめることが必要だと思う〉と語られ，学んだことを形式知化して残していくための活動

表 2. 自主的な学習会の意義

カテゴリー	サブカテゴリー	インタビューデータ
エンパワーする場	ほっとでき充電できる場	羽を休める巣
		他の人の話を聞いて心がホッとする
		自信持っていいんだと充電できる
		大切にしなきゃいけないことに戻れるからホッとできる
		理解してくれる人がいることが幸せ
	自分の思いを表現できる場	安心して自分の思いを言える貴重な場
		自由に自分の考えていることを言い話し合える大切な場
		自分のことを自分で表現できることが素敵だと思う
	互いに認めあい励ましあう場	それでいいよって励ましてくれる
		いいじゃないって言われてまた頑張ろうってなる
		ちょっと肩を押してもらえる
理念，姿勢，態度を確認し共有する場	自分の立ち位置を確認し共有する場	自分の立ち位置が分かる見える
		自分のあり方を確認し共有できる場
		自分の立ち位置や見方がこれでいいんだど確認できる
	保健師活動のマインドに触れる場	一貫して住民を大事にするという姿勢に共感する
		住民中心の考え方を聞くと自信が持てる
相互につながり活動を伝承する場	活動のエッセンスやエキスを共有する場	貴重なエッセンスを聞かせてもらえる
		すごい活動を展開した時の思いを聞くとそのエキスがでてくる
		保健師の活動は何か整理できないけど知りたいと思っている
		普通の研修では聞けない活動の裏側や苦労話が聞ける
	互いに学びあう場	誰が来てもいいし何を言ってもいいし気楽に学び合える場がほしい
		互いに勉強してみようしてみたいっていう気持ちがあるので参加している
		みんな同じように悩むだろうから一緒に勉強したい
		悩んだり失敗したことも伝えたい
	先輩からの学びを伝える場	先輩に教えてもらったことを伝えたい
		保健師の魅力を引き継ぎたい
		自分が育てられてきたことを伝えたい
		その人らしい先輩保健師の活動を切らしたくない
		一緒に考える中で活動の基本が身につく
	活動のおもしろさを伝える場	ダイナミックな活動の手ごたえやおもしろさを感じてもらいたい
		保健師の活動のすごさを味わってほしい
		保健師の活動はひとつではなくいろいろあるところが楽しいことを伝えたい
活動を見直し修正する場	自分の活動をふり返る場	自分はどうだったかとふり返る
		間違っていたり行き過ぎていたりする部分を修正できる
		自分の活動を見直してこれでいいんだと思う
	新たな活動への気づきを得る場	みんなすごい仕事をしているなと刺激を受ける
		自分とは異なる考え方や活動を提案してくれる
		他の人の一言で大事にすべきだったことに気づかされる
形式知化する場	活動記録様式の形式化	学習会をして地域保健活動の展開過程と成果を記録する様式を作った
	学習会報告書の作成	学習会で学んだことを報告書としてまとめることが必要だと思う

を導く場となっていることが理解できる。

2. 報告書の内容

以下では，報告書での表現は，〈　〉で示す。報告書には，学習会に参加している保健師らの置かれている状況，学習会の契機，学習会のプログラムと実際の活動内容，学習会の意義等について記されていた。

保健師の置かれている状況については，仕事の形態や方法の変化と関連付けて次のように記載されていた。〈地域保健法以降，保健師の仕事の仕方が地区担当制から業務別専任性に切り変えられるところが増え〉，このことにより，〈地域の健康水準を高める保健師の活動が宙に浮き，結核や難病，精神等の業務を専任することが保健師の専門性の発揮だと思いこむ保健師がいる状況になっている〉と記している。

学習会の契機については，〈業務分担化し，黙々と自分の仕事をし周りの状況も視野に入らず，事例について同僚や先輩に相談する場面も少なくなってきた〉こと等がと記され，〈後輩達からA県の保健師の活動はこのままで本当によいのだろうか？との疑問を投げかけられたが，明確な回答や実践活動を示すこともできず，何かできることがないかと考えた〉などと記している。

実際の学習会の意義については，〈この会に来ることで仲間や仕事について語り合うことの楽しさを久振りに味わえた〉〈悶々とした思いは皆同じなんだと心強く思えたこと〉〈参加し多くの学びや刺激を受けることができた〉〈制度が変わり新たな事業に関わるたびにこれは保健師としてのアイデンティティに悩みながらずっと仕事をしてきたが，職場や世代を超えて意見交換できたことによって，地区活動の組み立て方を確認することができた〉〈この会が終了するのはさびしい〉〈もっと周りの身近な人たちともこんな思いを共有できる場がもてるとよいなと思っている〉こと等が記されていた。

考　　察

1. 実践コミュニティの構造と必要性

1) 実践コミュニティの基本構造

ウェンガーら[1]は，「実践コミュニティには多様な形態があるが，基本的な構造は同じであり，領域，コミュニティ，実践の3つの基本要素のユニークな組み合わせである」としている。領域（Domain）とは，メンバーの間に一体感を生み出す共通の基盤となる知識領域である。この領域は，メンバーの参加を促し，学習を導き，行動に意味を与える。コミュニティ（Community）とは，メンバーのものの見方や枠組みを共有しながら学習する社会的構造であり，相互交流が活発で豊かな関係が育まれる。実践（Practice）とは，コミュニティ・メンバーが共有するアイデア，ツールや様式，情報，物語等のことである。

このウェンガーらのいう基本構造に照らしてみると，本研究における対象者が参加する自主的な学習会における領域とは，保健師活動の基盤となる知識や活動の範囲である。コミュニティとは，自主的な学習会での交流や学び合う構造そのものである。実践とは，学習会の場で共有される保健師活動に関わるアイデア，ツールや様式，情報，物語等となる。このことから，本研究の対象者が参画している自主的な学習会は，ウェンガーらのいう実践コミュニティの基本構造を持っていると考える。

2) 実践コミュニティの必要性

本研究の対象者が実践コミュニティを必要とした背景には，〈これでいいのか，大切なことは何なのか，疑問，矛盾を感じる〉ことや〈分散配置のためひとり職場なので，自分が向いている方に迷う〉こと等の【仕事の中での疑問･不安】あった。さらに，〈自分の考えや意見が聞いてもらえない〉ことや〈一緒に語る場，理解しあう場がない〉という【交流の場の不足】があった。

参加者は，【仕事の中での疑問・不安】を【交流の場の不足】により，職場において解消することが難しく，組織としての考え方や上下関係，担当業務の違い等によって，同じ保健師同士であっ

ても保健師としての考えを自由に共有することができない状況にあった。これにより，孤立感を抱き，積極性を失い，保健師としての力が発揮できなくなっているものと考えられる。このような背景があり，保健師活動の原点を確認しあう場，創造的な活動を模索する場が必要とされたものと考えられる。

高橋ら[5]は，職場おける実践コミュニティの必要性に触れた著書『不機嫌な職場』において，「効率化に重きがおかれた成果主義の導入」により，個人の「専門性の深化」や「会社のインフォーマル活動の消失」が起きたとしている。そして，そのマイナス面の影響として，「仕事と仕事，個人と個人の壁が高くなり，関わらない，協力しない」といった病んだ組織となっていること憂いている。さらに，「このような関係が希薄化した職場では，自己肯定感を得がたいために，時に周囲との関係を絶ち，時に周囲との関係を拒みながら，自分を守ろうとする行動が広がってしまっている」という。筆者らも現場にあった自身の体験からこの高橋らの指摘と同じ様な状況が保健師の働く職場が生じていることを実感してきた。すなわち，地域保健活動の現場は，チームでの活動が求められる職場にもかかわらず，保健師同士での会話が少なくなり，どうしたらよいかわからないが聞かない，困っている後輩がいても助けない，自らもチャレンジしないといった職場に陥っているという状況である。このような状況は，高橋ら[5]が指摘しているように，1990年半ばごろからの行政改革によるリストラが進められた中での成果主義の導入や分散配置，業務分担制等が徹底された以降より顕著になってきていた。本研究における実践コミュニティの必要とされる背景に，筆者らが実感してきた高橋らのいう『不機嫌な職場』生じていたことを裏付けるものとなっていると考える。

2. 保健師の実践コミュニティの場

1) エンパワーする場

本研究で抽出された【エンパワーする場】には，〔ほっとでき充電できる場〕，〔自分の思いを表現できる場〕，〔互いに認めあい励ましあう場〕のサブカテゴリーが含まれていた。

ウェンガーら[1]は，「実践コミュニティによってもたらされる安心感から，新しい試みが可能となる」としている。安梅[6]は，エンパワーについて，「元気にすること，力を引き出すこと，そして共感に基づいた人間同士のネットワーク化」であるという。

本研究における自主的な学習会の場での相互交流の中で，参加者に，安心感をもたらし自分の思いを表現し，互いに認めあい励ましあうことにより，参加者自身の新しい試みや自分自身の課題を達成できるという自信が高揚する場，すなわち【エンパワーする場】となっているものと考える。

2) 理念・姿勢・態度を確認し共有する場

本研究で抽出された【理念・姿勢・態度を確認し共有する場】には，〔自分の立ち位置を確認し共有する場〕，〔保健師活動のマインドに触れる場〕が含まれていた。

このことは，自主的な学習会の場は，他者の実践活動と自身の活動を共有する中で，自分自身の立ち位置を確認しながら，その拠り所となる保健師活動のマインド，すなわち，理念・姿勢・態度と照らし合わせ，自身のあり方を探り，その妥当性を検討，検証している場となっていることを示唆している。レイブら[7]は，アイデンティを「自己についてのかなり安定した知覚」としている。また，ウェンガーら[1]は実践コミュニティにおいて，「人々の間に信頼関係を築き，帰属意識を醸成し，探究心を引き出し，メンバーに専門家としての自信やアイデンティティを与える」としている。このことからは，本研究での【理念・姿勢・態度を確認し共有する場】は，保健師自身のアイデンティを問い直し共有しあう場となっていることを意味していると考える。

3) 相互につながり活動を伝承する場

本研究で抽出された【相互につながり活動を伝承する場】には，〔活動のエッセンスやエキスを共有する場〕，〔互いに学び合う場〕，〔先輩からの学びを伝える場〕，〔活動のおもしろさを伝える場〕の4つのサブカテゴリーが含まれていた。

ウインガーらは，「コミュニティは成熟するに

つれ，同業者の親密感というべきものが育ってくる。コミュニティのメンバーは，お互いにどのような方式で専門的な問題に取り組んでいるかを理解するようになる。また会話を交わしたり合同プロジェクトに参加したりするうちに，他のメンバーの強みと弱みを知り，かれらの発言や活力，関心，見解，個性を尊重するようになる」と述べている。このようにして，【エンパワーする場】【理念・姿勢・態度を確認し共有する場】を得た保健師たちは，互いの強みや弱み，発言や活力，関心，見解，個性を尊重し，仲間としての対等な人間関係の構築を促進していく。そして，同僚または先輩後輩とのつながりの中で，互いに学び合い，活動のエッセンスやエキスを共有し，先輩からの学びや活動の面白さを伝えていく場としての【相互につながり活動を伝承する場】を機能させていくものと考えられる。

4）活動をふり返り修正する場

本研究で抽出された【活動を見直し修正する場】には，〔自分の活動を振り返る場〕〔新たな活動への気づきを得る場〕の2つのサブカテゴリーが含まれていた。

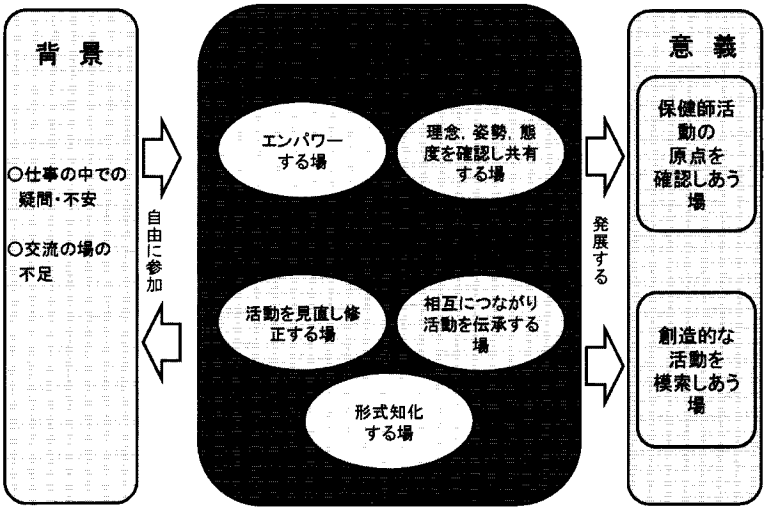
ウェンガーら[1]は，実践者が「専門的技術を向上させるためには，同じような状況に直面する人々と交流する機会が必要である」とし，「情報や洞察を分かち合い」，「共通の問題についてじっくり考え，様々なアイデアの可能性を探り，お互いのために共鳴板の役割を果たす」としている。

本研究の自主的な学習会の場は，これでいいのか，大切なことは何なのか，疑問・矛盾を感じること等ついて，様々な意見と自分の考えを互いに出しあう中で自分の活動を振り返り，新たな気づきを得ることにより【活動を見直し修正する場】となっていることがわかる。

実践者が自分自身の活動やそのあり方をより深く振り返るためには，同じ実践者という立場の他者の存在が重要な意味を持つ。【活動をふり返り修正する場】は，ショーン[8]のいう実践者の「省察」を得られる場を提供しているものともいえる。この【活動を見直し修正する場】は，「省察」によって，経験という「知識・スキルの変化を促す外界との相互作用」[9]の質を，他者との相互交流を通して高める場となっていることを示唆するものである。

5）形式知化する場

野中ら[10]によれば形式知とは，「暗黙知を言葉や体形にしたデジタルな知識」であり，暗黙知とは「知っていても言葉には変換できない経験的，



図．保健師の実践コミュニティの意義

身体的なアナログの知」であるという。ウェンガーら[1]は，実践コミュニティにおいて「実践者のニーズに適した方法で知識を文書化することも有用」であるといい，実践コミュニティにおいて専門知識の形式知化が可能であることを述べている。そして，コミュニティが成熟するにつれ，もっと多くの知識を生み出さなければならない分野を発見することが多い」という。本研究での【形式知化の場】には，〔活動記録様式の形式化〕，〔学習会報告書の作成〕が含まれており，実践者が必要とする知識の普遍化やさらに活動の質を高めるために新たな知識を生み出す取組みも開始されていたことが理解される。

3. 実践コミュニティの2つの意義

本研究における自主的な学習会へ参加している保健師へのインタビューの分析結果からは，保健師活動の実践に関する相互交流を通して，相互に影響を与えあっており，この場は，【エンパワーする場】，【理念・姿勢・態度を確認し共有する場】，【相互につながり活動を伝承する場】【活動を見直し修正する場】，【形式知化する場】となっていることがわかった。

また，自主的な学習会がまとめた報告書によると，この学習会に参加したことによって，活動の内容や形態，方法の変化等により，先輩や同僚と話し合うことが少なくなる中で，職場や世代を超えて語り合え，学びあえたこと等の多くの意義について記されていた。以上のインタビュー結果と報告書の内容を照らし合わせ，本研究の自主的な学習会の意義について以下に述べる。

ウェンガーら[1]は，実践コミュニティでは「お互いの実践，反応，思考様式に関する深い洞察が育まれ，実践全体に対する共同の理解が進む」といい，「同僚と何か大切なものと共有できる人と交流すること」に価値を感じて参加している者がいることに触れている。これと同様に，インタビューで得られた【エンパワーする場】【理念・姿勢・態度を確認し共有する場】には，業務分担化され周りの状況も視野に入らず，同僚や先輩に相談する場面も少なくなり，このままで本当によいのだろうか？との疑問をもっている保健師達にとって，大切なものを共有する，「保健師活動の原点を確認し合う場」となっていくことの意義があることが示唆される。

さらに，この学習会の場を【相互につながり活動を伝承する場】，【活動をふり返り修正する場】，【形式知化する場】では，学習会での気付きや学びのポイントをまとめ報告書を作成し，さらにこれで終わらせることなくこの会を終わらせることなくさらに発展させようとしている。ウェンガーら[1]は，実践コミュニティが発展すると，「領域に対する深い知識を生み出す」ようになり，その領域には「発見すべき新しい側面は常にある。技能の探求は，領域が存続する限り続いていく」ことに触れ，その領域に対し「新しい方向を思い描くことができるようになる」という。このことと同様に，【相互につながり活動を伝承する場】，【活動をふり返り修正する場】，【形式知化する場】には，保健師たちのこれからの「創造的な保健活動を模索する場」へつながっていくことの意義があることも示唆される。これらの関係性を図（保健師の実践コミュニティの意義）に示した。

結　　論

本研究では，自主的な学習会を参画している保健師へのインタビューと報告書の内容から，保健師の実践コミュニティの背景と意義について検討した。その結果，実践コミュニティの背景には，【仕事の中での疑問・不安】【交流の場の不足】があり，保健師の自主的学習会の場は，【エンパワーする場】，【理念・姿勢・態度を確認し共有する場】，【相互につながり活動を伝承する場】，【活動を見直し修正する場】，【形式知化する場】であることが整理できた。そして，【エンパワーする場】，【理念・姿勢・態度を確認し共有する場】は，「保健師活動の原点を確認し合う場」へ発展する可能性を持つという意義があることが，【相互につながり活動を伝承する場】【活動を見直し修正する場】，【形式知化する場】は，「創造的な活動を模索し合う場」へ発展する可能性を持つという意義があることが示唆された。

文　献

1) Wenger, E., McDermott, R., Snyder, W.M. : Cultivating Communities of Practice, Harvard Business School Press, Boston, 2002 : 野村恭彦監修，野中郁次郎解説，櫻井祐子訳，コミュニティ・オブ・プラクティス，翔泳社，東京，2002, 33-336
2) 座談会：保健師活動の原点に立ち返る　みてきいて・つないでうごかし・つくってみせる，月刊地域保健，**50**, 05, 6-43, 2009
3) 大場エミ：保健師現任教育の全国状況，保健師ジャーナル，**65**, 434-437, 2009
4) 座談会：私たちが受け継いだこと，伝えたいこと，保健師ジャーナル，**65**, 458-465, 2009
5) 高橋克徳，河合太介，永田稔，渡部幹：不機嫌な職場－なぜ社員同士で協力できないのか，講談社，東京，2008, 13-59
6) 安梅勅江：コミュニティ・エンパワメントの技法当事者主体の新しいシステムづくり，医歯薬出版，東京，2005, 5
7) Lave, J., Wenger, E. : Situated Leaning Legitimate Peripheral Participation, Cambridge University Press, 1991 : 佐伯胖訳，状況に埋め込まれた学習－正統的周辺参加－，産業図書，東京，1993, 60-66
8) Schon, D.A. : The Reflective Practitioner, Basic Books, Inc., 1983 : 佐藤学・秋田喜代美訳，専門家の知恵－反省的実践家は行為しながら考える，ゆみる出版，東京，2001, 101-121
9) 松尾睦：経験からの学習－プロフェッショナルへの成長プロセス－，同文社出版，東京，2006, 60
10) 野中郁次郎，紺野登：知識創造の方法論，東洋経済新報社，東京，2003, 55-57